

上演10 福島県代表
福島県立二本松実業高等学校
作 松実演劇同好会
「夜明けのモービー・ディック」

講評文

宮城県泉松陵高等学校 小畑空羽音

この作品は、自分自身と真摯に向き合い、改めて「自分とは何だろう」と考えさせられる劇だった。深い思索を促されると同時に、明日への力をもらい、励まされるような感覚を抱いた。

緞帳が上がリ、「ウェラーマン」の旋律が流れる中、長い間何かと戦い、待ち望んできたものがある——そんな強い意志が舞台から伝わってきました。物語が進むにつれ、登場人物たちが演劇同好会に入った経緯が描かれ、一人ひとりが抱える背景が明かされていきます。彼らが同好会に加わる場面では、その切実な姿に自然と感情移入していた。

また、キャプテンが他の登場人物に「この船に乗るか、乗らないか」と問いかける場面は、「この同好会に入るか、入らないか」という比喻表現として機能していた。キャプテンという役を演じ続ける先輩と、ずっと役を演じ続けるわけではない登場人物たちが対照的に描かれることで、劇中が「劇なのか現実なのか」曖昧になる瞬間が生まれていた。特に先輩（キャプテン）と坂崎との関係性や、先輩に対する皆の想いが丁寧に描かれており、観客の興味を強く惹きつけていたように思います。

各登場人物たちの生きる糧や悩み、抱えているものは、「モービー・ディック」という“自分が戦うべき相手”として象徴され、それぞれがそれに立ち向かい戦っていました。皆、自分自身を変えたいという思いを抱えており、「夜明けは来る」という言葉は、戦うべき相手はいずれ見つかるという希望を示している。また、自由を求めることや、完璧を求めたり感情的になったりすることは、道徳心を揺さぶるものなのだ。私たち観客は、まるでキャプテンから道徳の授業を受けているかのようだった。

言葉は時に人を傷つけ、また救うものでもある。だからこそ、キャラクターそれぞれの心情に寄り添うことができたのだろう。作中の「どうして学校へ行くの？」という坂崎の問いは、高校生の心に強く刺さる言葉であり、大人か学生か、あるいはこれまでの経験によって、その答えは大きく変わるものなのではないか。

ラストシーンでは、かつてのいじめっ子に呼び出された先輩が怪我を負い、入院してしまう。しかし、その病院の場所が分からない。自分たちを見つけ、向き合わせてくれた先輩のもとへ行くため、必死に病院を探し走り続ける姿。その場面には他にも複数の意味が重なっているように感じられ、その後の展開を私たち観客の想像に委ねていると感じた。

演劇が人の救いになる姿を見て、やはり演劇は奥深く、誰にでも通じるものがあるのだと感じさせてくれる、最高の舞台をありがとうございました。